

日本人の本音と建前

——私の触れた日本——

社会科学部留学生 曾 秋 桂

您好！今日は！

您好！今日は！



広島的第一印象

多くの人々と同じように、私の広島に対するイメージは、原爆が落とされた所であるということに止まっていたのです。けれども、東京から

新幹線に乗って、いくつかのトンネルを抜けると広島であったのです。その時に、文学作品的な涼しい気分に入れ替えられたようなことに印象が強かったです。しかし、広島駅を踏みしめた瞬間に、その美しい感じが綺麗に消えてしまいました。それは、地下ではなくて、地上を走っている広島電車の姿が目に入ったからです。蜘蛛十字の地下鉄で、東京大都会の賑やかさを十分に味わったばかりの私にとっては、広島電車ほどみずほらしいものはないのです。その時の私は、とんでもない所に来てしまったと感じて肩を落としました。だが、日が経つにつれて、穏やかな広島の雰囲気包まれて、異国にある寂しさは、一雨ごとに春になるように気持ちが安らいで来ました。広島に接すれば接するほど、広島に対する親しみは、知らず知らずにわいてくるところこそ、広島の魅力だと言えるでしょう。このように私は広島で三年の歳月を送ってきました。そのうちで、沢山の未知の人との出会い、異文化との衝突、自己反省への契機などは、いずれも日本での留学生生活を充実させてくれて、ありがたく思っています。またこういった広島での日々は、私の青春の忘れがたき一頁として刻まれています。

日本人の本音と建前

初めて異文化に接触する時に、一番難しいのは、

何と言っても言葉の障害であり、コミュニケーションの難所です。私は、かつて台湾の東呉大学の日本語学科で四年間日本語を勉強してきました。そのお陰で、日本に来て、生活上特に困ったことはありませんでした。本当に助かりました。しかし、難しいと思うのは、日本語という言葉の問題を越えて、深入りする文化にかかわっている所にあるというのです。すなわち、よく指摘されているように、日本人が本音と建前を混ぜて使っているのは、その一つです。この点について、私もかなり戸惑い、そして気を遣ってきました。しかし、その戸惑いを和らげてくれたのは、日本語研修センターに手伝いに来ている日本人のある主婦の林さんでした。

話は私が日本に来る前にさかのほりたいと思います。日本に来る前に、上辺に日本文化について、習ったことがあります。その中で、日本人が建前と本音をよく一緒に使っているの、日本人の言ったことをそのまま信じてはいけないという話がありました。例えば、日本人に家に遊びにいらっしやいと誘われて、そのまま信じて遊びに行くのは、大間違いの種のようなのです。なぜかという、家に遊びにいらっしやいという言葉は、単に日本人同志の付き合いに常用する挨拶の言葉の一つにすぎないからです。一度言われただけで、そのまま信じて日本人の家に遊びに行ったら、きっと日本人に嫌われて、失礼なことになるかもしれないのだそうです。二度、三度、と誘われるようになって初めて日本人の家に遊びに行ってもよいと、判断した方が安全だそうです。私は林さんと知り合いになるまで、ずっとこういったことを心がけてきました。

林さんと知り合いになったのは、研修センターで日本語を勉強した頃です。二回ほど林さ

んに家に遊びに来て下さいと言われましたけれども、私はそのたびに遠慮しました。ある日、授業中、「広島での生活」というテーマで発表する時に、私は素直に自分の悩んでいる日本人の本音と建前のことを述べました。その日、授業が終わって、林さんの方からコーヒーでも飲みに行かないかと誘ってくれました。私はそれに応じて、その場で楽しく世間話をして、次回の授業が終わった後、林さんの家に連れて行ってもらうことを約束して別れました。



このように、林さんは、はっきりものを言う方ですから、私も気楽に自分の思っているとおりに表現できます。それ故に長く付き合っています。林さんとの付き合いの中で、私は一つのことを勉強しました。それは、日本の事情を何も知らずに、日本に来たら、留学生にとっても日本人にとっても、大変なことで、また私と同じように、ある程度日本の事情を勉強してきても、教科書に書いてあるものが、すべて日本の現状であると思ってしまうのは、危険に入り込む第一歩だということです。経験は人によるものです。「十人十色」という日本の諺がありますが、この諺が含んでいる意味合いは、単に日本に限られたことではないと思います。人がいる所すべてに通用する言葉であると言っていいでしょう。ですから、林さんと知り合ったことで、「日本人がこうだ」、「日本人がそうだ」という発言を、知らず知らずに、「私の知っている日本人はこうだ」のように、言い直すようになっていきます。それにもかかわらず、日本の事を勉強しに来る留学生にとっては、日本人のあいまいなものの言い方には、やはりなじめないのです。

はしの衝突：異文化は乗り越えられるか

異文化との衝突という点については、長い年月をかけても乗り越えにくい部分があると実感しています。完全に理解し合うことは、少し無理があるけれども、それぞれ違っている考え方をお互いに認めたらどうかと、最近思い続けています。簡単に例を取り上げてみましょう。

それは、前述した林さんと一緒に遊びに行つて食事した時の事です。確かにその時はさざえのつば焼きを食べました。林さんはさざえのお肉を取り出そうとする時に、少し難しそうに見えました。私は好意を持って助けるつもりで、自分のおはしで林さんの取り出そうとするお肉を抑えました。が、その途端、林さんの顔色が少し変わりました。私はその訳が分かりませんが、その後、林さんは、親切にその理由を説明してくれました。実は、日本人は同じものに二つ以上のおはしをつけることを嫌うからです。同じものに二つ以上のおはしをつけてもいいのは、ただお葬式の骨拾いの時に限られています。ですから、私が自分のおはしを出すこと自体が、日本人に嫌な思いをさせることになります。それを聞いて、好意を持って助けようとした私の親切が、却って無駄になってしまったようで、何となく空しい感じがしました。恐らく多くの日本人は自分が嫌でも相手を傷つけないように、その場では口に出さないでしょう。しかし、私はいくら空しい感じにされても、やはり本当のことを教えてもらいたいです。なぜかという、その場で、すなわち、一つの日本事情の勉強であり、何よりも大切なものです。その場で、勉強の機会を逃したら、多分二つ以上のおはしを同じものにつけることに対して日本人が抱く嫌な気持ちを知らずにいたでしょう。なるほど日本人には、そういう一面があるということが発見できて、面白いと思いました。しかし、私の国では、食事の時に、誰かが何かをひっくり返し難しそうにしている時に、親切に自分のおはしを出して助けてあげるのは、思いやりの現れです。どちらが正しいかということが問題なのではなく、両方とも事実なのであり、ものごとの見方による違いだけです。お互いに異

なった文化を尊重すべきだと思っています。
「このように、私は広島では沢山のひと知り合
いになり、文化の違いをそのたびごとに発見し
ています。私はそういった発見のひとつひとつ
に胸を躍らせます。それにしても、これらの事
柄は、私にどんな意味を持たせたのか、すな
わち、自己反省の契機がどのように与えられたか、
ということが重要なのです。」

繰り返しになるかもしれませんが、よく外国
人に指摘される「日本人の本音と建前」は、日
本社会だけに通用し、また欠かせないものか
もしれません。けれども、全く日本の事を知ら
ずに来る留学生、あるいは、ある程度日本事情
に詳しい留学生にとっても、留学生を傷つけない
ように、日本社会で通用する建前を言ってしまう
は、留学生は却って日本の真の姿を十分に捉
えられないのです。いつか留学生は、自分の日
本に対する考え方が間違っていることに気がつ
けば、不愉快な思いをするだけのことになるの
です。それより、初めにはっきりと日本の事情
が分かれば、時間が経つにつれて、留学生自身
が自然に日本社会に欠かせない「本音と建前」
の微妙な使い分けに慣れてきます。留学生はそ
の時、心を開いてくれる日本の友人に感謝の念

を抱き、非難の代わり、理解しようとする心持
ちが変わっていくかもしれません。一方、留
学生は、せっかく日本に来て、非難の言葉ばかり
かけても仕方がないです。もっと身を持って、
なぜ日本人はこうなったのか、文化的な背景を
たどって探せば、きっと答えが出てくるでしょう。
そうすると、日本に来ること自体の意義をしっ
かり確かめられるのではないのでしょうか。

留学の二重の意義

さて、留学自体は、それぞれ違っている文化
の背景に挟まれていることを体験するというこ
とです。留学生が日本に来ることによって、日
本文化を理解することができるようになること
と同じように、日本人もまた、留学生をとおし
て今まで知らなかった文化に接することができる
のではないかと思います。違った考え方を知
ることには、楽しみがあり、更にそこから相互
に理解し合う可能性が生まれるのです。相手の
国の文化を尊重することは、すなわち自己の文
化を理解してもらうことにつながっていくと思
います。すべての国を日本化するわけではなくて、
日本固有のものをなくすのではなく、真の理解
の輪を広げようと心より願っております。

